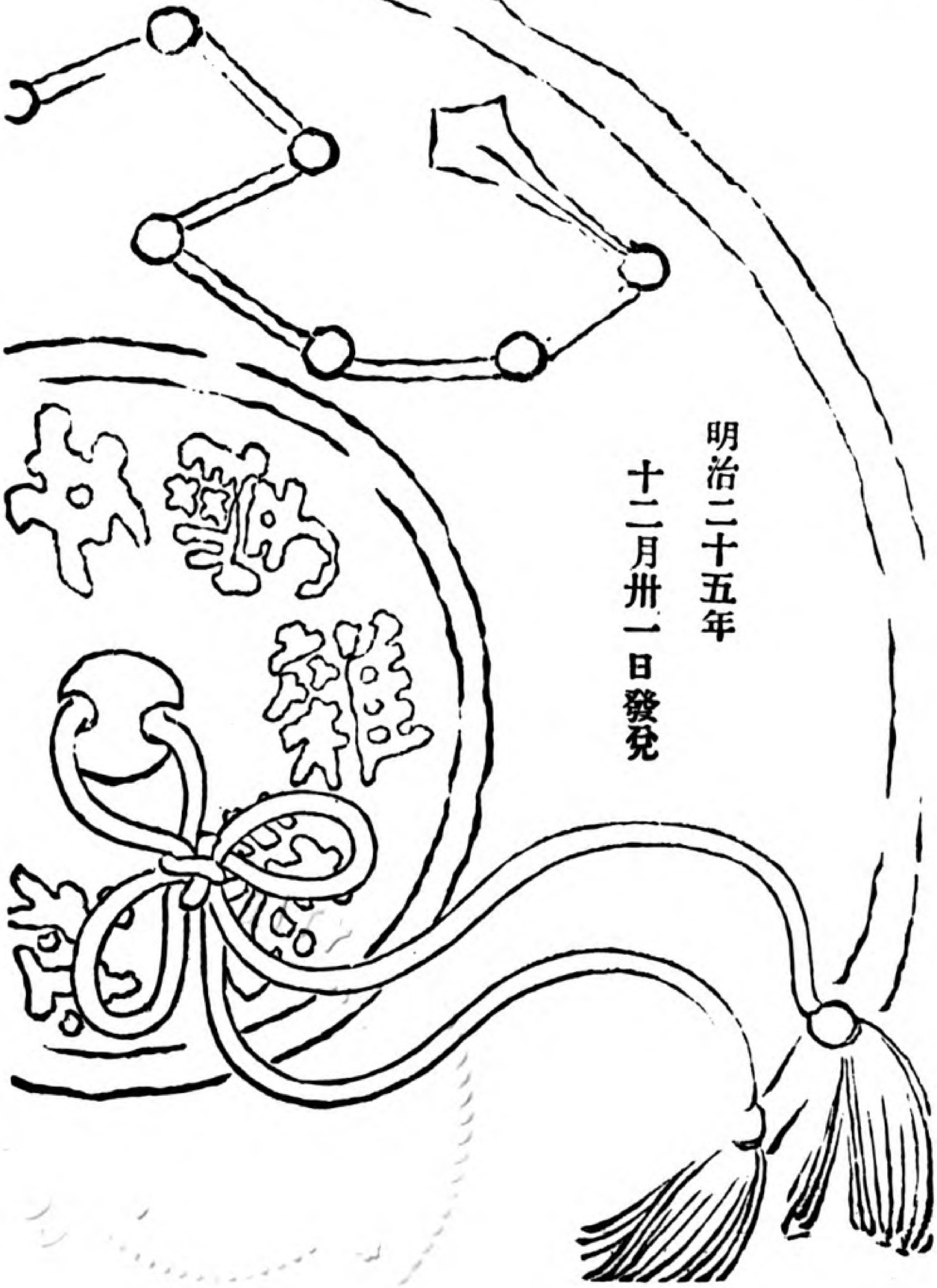
Dec. 1892
no. 335-1

女學雜誌

第三百三拾五號
甲の巻



明治二十五年
十二月廿一日發兌

注意

●社説　年暮策士の述懐
●史傳　切支丹宗迫害の理由（雪山外史）
●批評　鬼奴を讀む（天知子）
●雜錄　紅蘭詩集を讀む（泣血生）○千島號の覆沒をいたみ樂府にならいてよめる（戸川殘花）○歳末の感（ふみ子）○富貴（一）クリスチャン（二）あはれみ（三）憂ひ（四）機の屋綾織
●時事　超然内閣○公人の禮○板垣自由黨總理の演説○衆議院侮辱事件○羅馬字雜誌○違憲なりとの決議○山縣伯○寧ろ好む○鐵道の議○福澤門○德育○渡邊洪基氏○河野廣中氏○順序あり○興隆佛法會○迫害及世の要求
●寄書　現今青年會の流弊（一）滔々たる青年會（二）基督教青年會（三）青年の責任（山月子）○煙草の利害（蘇水生）
●片々

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

女學雜誌　第三百卅五號　明治二十五年十二月廿一日發兌

The Woman's Magazine.

(JOGAKU ZASSHI.)

本號（第三百三拾五號）目次

●社說　年暮策士の述懷
●史傳　切支丹宗迫害の理由（雪山外史）
●批評　鬼奴を讀む（天知子）
●雜錄　紅蘭詩集を讀む（泣血生）○千島號の覆沒をいたみ樂府にならひてよめる（戸川殘花）○歲末の感（ふみ子）○富貴（一）クリスチャン（二）あはれみ（三）憂ひ（四）機の屋綾織
●時事　超然內閣 ○公人の禮 ○板垣自由黨總理の演說 ○衆議院侮辱事件 ○羅馬字雜誌 ○違憲なりとの決議 ○山縣伯 ○寧ろ好む ○鐵道の議 ○福澤門 ○德育 ○渡邊洪基氏 ○河野廣中氏 ○順序あり ○與隆佛法會 ○迫害及世の要求
●寄書　現今青年會の流弊（一）沼々たる青年會（二）基督教青年會（三）青年の責任（山月子）○煙草の利害（蘇水生）
●片々

豫告

新年初刊

一月七日發兌の赤表に掲載

貞婦於石　櫻井成明著

內助（西洋小說）　花圃女史譯

テニソンの詩　若松しづ子

前週（第三百卅四號）赤表

●社說　日本高等女子教育の爲め米國婦人奬學々資金
●兒監　吾宿の花（第七回、下の三）若松しづ子
●文藝　候文章 ○バイロンとゲーテ（下）
●家政　日記をつける事（ふみ子）○家內重寶錄 ○育兒
●雜錄　理想上の結婚（會津、稚松眞棹 ○今昔ものがたり（武家氣質。僞善と慈悲。賢君の自省。女の前帶）秋玉庵集 ○クリスマス祝ひの歌（紫苑山人譯）
●小說　朝顏（手習屋主人）
●史傳　フランセス、ウヰラード女史の傳（其二）
●摘要　孤女學院○棄兒統計
●時事　年終る○岡山孤兒院
●孤兒之友
●女報

前々週（第三百卅四號）白表

○社說　荒野一望（教育界。經濟界。文學界。宗教界。政治界）
○批評　罪と罰（透谷子評）○大西文學士香川景樹翁歌論に對する批評（雲峯子）○志賀重昂氏地理學講義
○史傳　韓非子を觀る（天知子）
○雜錄　紅蘭詩集を讀む（泣血生）
○摘要　基督教徒中の文學者美術家
○時事　王佐 ○面白くなし ○高利の內國債 ○千島艦沈沒 ○將軍老ひたり ○其二 ○其三 ○學生の發火演習 ○福澤先生の義俠 ○新次官の伎倆 ○誰か新次官を推せし ○辻久保田二君の評 ○一文部省次官 ○地方官の流勢 ○銀林書記官 ○名文章 ○條約改正最終の覺悟 ○七日の衆議院 ○和衷協同 ○其案美ならざるに非ず ○井上角五郎 ○二君の近狀 ○徒弟夜學校 ○洪河の源泉は枯葉の下にあり
○片々

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

女學雜誌 第三百卅五號 明治二十五年十二月廿一日發兌

社説

年暮、策士の述懐

本年一月、吾黨は論じて「年頭策士多し」と慨せり。識者の中、覽て一笑に附し、漠然たる道話遂に何の効かあらんと非りたる論士なきにしもあらじ。其人や、德の策に優る所以を覺らざるにあらず、但だ方今劇忙の世、若く優然として自から守るを以て安んず可らず、速やかに策を施こし直ちに才を弄せずんば、終に一事を爲さずして身先づ死せんと苦慮する底の人なるべし。故に、吾黨は今ま其人に問はん、君が策果して効を奏せしや何如にと。年頭の策士、もし細慮密案せば、一歲の末期に達して、今ま大ひに感悟する所ろなくんばあらじ。請ふ試みに、其所感を聽かん。

想ふに、其人或は曰はんとす。吾は素と、策あるを以て、智なりとし、策の多きを以て、智の多きとなしき、而して、今や策多きは、無策に同じく、智多きは智なきに均しきとを覺りたり。吾、策を施こす時は、人亦た策を以て酬ゆ。吾、智を以て臨む時は、人亦た智を以て對す。而して、策と策と、智と智との相激する所ろは、遂に猾智狡策を以て相ひ爭ふの戰に終らずんばあらず。われ、今年幾度びか策智を施こして、遂に得たる所ろ何ものぞ。多少の黃金を得たり、多少の虛名を得たり、多少の地位を得たり。然れども、黃金を得るは、人の眞情を得るに若かず、虛名を博するは、友のかたらひの味はふに及ばず、格式上に於ける地位に登るは、人の信任を領するに何れぞ。あゝ、吾れ大ひに得たるが如くして、而して、大ひに得べきものを失なへり。黃金情あらず、吾が寂寞の念を慰さむるに堪へず、虛名薄々、飛んで浮雲に似たり、長久へに吾と伴ふものにあらず、吾地位の爲めに吾に伏するものは、稲穗の風にうなだれ、流に葦の曲るが如し。あゝ吾が無限の情に同ずるに堪へんや。且つ夫れ、世人互ひに策智を以て相臨むときは、兹に敵意伏す、兹に戰氣ひそむ。彼等到底和然として相ひ親しむと能はず、彼等は永久幼な子の如くなると能はざる也。彼等は利巧なるを以て大人物の資格と誤解し、幼ならしきを以て、巨人の眞情なりと辨ずるとなし。

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

孟子曰く、夫れ大人は小兒の心を存すと。クリスト曰く、孩提の如くならずば、理想國に入ると能はずと。此般の福音は策士の得て辯知する所ろにあらず。彼等は、四面に楚歌を聞けど、ホザナの賛美を耳にすると能はず、四海皆兄なりと覺悟すれど、天下悉とく同胞なりと觀ずると能はず。戸を閉すは夜のみなれど、彼等は不斷胸門を密閉して、人の窺ふを許さず、度量を放開して衆物を呑むが如きは、其の決して爲すとを得ざる所ろ也。彼等は、假令高潔ならずと云はるゝの汚名に忍ぶとも、暗愚なりとの批評を甘受すると能はず。彼等は、ソクラテースの哲學に倣ひて、愚は即はち罪なりと思へり。故に彼等は、大賢の愚なる所以を知らず、常に小智に拘泥して、才氣を弄せずんば止まざる也。あゝ、吾も亦た彼等に似たり、而して、一歳の經歴、遂に驗知せし所ろ何事ぞ。抑そも、文明の利器は、物質的の進歩を表證するもの耳。安臥して一日數百哩を旅行するの滊車あるの日と、晝夜兼行稍やく二十里を奔走するの日と、物質的に於て相違する所ろありと云へど、人の本性狀の上に於て差別する所あらず。其進歩は文明開化交際上の進歩のみ、其進歩は比較的同行の上の進歩のみ、所云る「人」なるものの眞價値の上に於て、何等の影響もなきなり。策を施こすの結果即はち之に均し。之が爲に快活を生ず、之が爲に便利を生ず、之が爲に繁昌忙劇を生ず、然れども、所云る「人」なるものの上に遂に益する所ろあらざる也。人は之が爲めに幾千天道人情に切となりしや。人は之が爲めに幾千愛思高徳を増せしや。人は之が爲めに幾千同情信義の交を増せしや。此等の諸點に於て毫も益する所なきのみならず、策智施こす所ろの結果、文明利器の擴張する影響、寧ろ此等もろ〳〵の要點に於て反つて減却損失する所のものあり。果して然らば、「人」の眞價値の爲に遂に何等の益とならざりしもの也。あゝ、吾一歳此の無益の方向に熱勉し、自個の眞徳を高めたるとあらず、世の眞進歩を進めたるとあらず、而して揚々然自ら得意せしものありしは、何等の醜ぞ。夫れ、少年の客氣は見て愉快なるもの也、快活なる豪放は聞て壯大なるもの也、然れども、單に豪壯を願はゞ、大川の逸流する、巨濤の暴起するを見るに若かず、單に烈甚を樂まば、雷電の轟ろき、暴風の叫ぶを聞くに若かず。抑そも此等の事は馬鹿〳〵しきものならずや。大言壯語を吐ひて

無責任の騷動を爲すは、眞の少年の責任にあらず、無學なる青年の戯むるゝ所ろなり。騷ぎ廻ることを以て有爲の秘訣とせば、一國の經綸を輿神を擔ぐ人に托すべし、奔走することを以て事業の要素とせば、天下の政事を郵便脚夫に任すべし。見よ、多くの血氣ある人、多少粗豪の事を爲して而してのち大抵愼密沈思の人となる。此れ其大有爲の氣象を磨滅せしのみにあらず、正當の經驗を了して、眞實の覺悟を得たるが爲めのみ。故に、單に道德々々と稱して、眞に積極的の經綸を懷抱せず、一種の道德的利己に陷いりて、切りに君子人の名譽を博せんとするが如き小人は齒牙に掛るに足らず。心中活火の猛炎絶ゆる時なく、万丈の氣焔消さんとして消すこと能はず、身を以て邦家に許し、一生を愛國愛人の役に犧牲にせんとするの志士にして、眞に成し實に遂ぐるの道を考ふる時は、遂に「策」の効なきことを大悟するもの也。人世の道多岐、日々の行事百のみならず、何の時か袖手傍觀して無責任の地に立つことを得んや。左れど、亦た人世に機會なるものあり、大勢潮の湧くが如く、猛風の山より吹起るが如く、振然、豪然として、一大時節の生じ來る時、此時や、上帝の指直指して、「今成せよ」と言ひ玉ふの時、天使、惡魔、万千の物見人、遙かに天界より臨視して、「我軍何如に勝敗するか」と窺ふの時、万民の心動搖し、呼吸して「何如にせん」と待ち、閉息し長大息するの時、此時に當りて眞に世の大需要に應じ、人間の眞正福利を計るもの、何んぞ策に據るの小人ならんや。あゝ、策や遂に効なし。策や、實に小し。あゝ策や眞に愚なり。策士何ぞ自から賢としとするの誤まれる。而して、吾誤まつて、此策に入れり。抑そも、平常日々の細務は、即はち大ひに合して大機會を造る。故に、此細務に應ずるの人の經驗も亦相ひ合して、此の大機會に應ずるの大腕手を造る。左れば、平常、小事にすら策を施こす所ろの小人は、遂に大事に臨んで、策以外の大道に據るの勇意を得ざるもの也。斯如き小人は、大風吹起つて、秋葉の散落するが如く消失する者也、而して、吾は、一年を此の憫然なる進路の爲に徒費したる也。

年頭の策士にして、若し今ま此如く感悟するに至らば、吾黨は之を祝す。今にして、尚ほ感悟せずんば、來年々頭に於て再び、本年頭の論文を呈せん、而して、來年々末に於て、更に亦た此論文を呈せんと欲す。

史傳

切支丹宗迫害の理由

雪山外史稿

凡そ基督教ほど社會の人類を救ふの實力ある教はあらざるなり又基督教ほど世人に誤解せられをる者はあらざるなり隨て其の迫害を受るも亦た他に其の例あるを見ざるなり蓋し獨り我邦の近古史上に於て其の肉震ひ骨飛ぶの慘狀を描出するのみにあらざるなり抑も主耶蘇基督在世の當時身親ら其の十字架に磔殺せらるゝを以て此の宗教の祖道とす即亦深く其の所以なきにあらざるなり基督曰く「罪の定る所以は光世に臨りしに人其の行の惡きに因て光を愛せず反て暗を愛すればなり凡そ惡を行す者は光を惡み其の行の責められざらんが爲に光に就らず」又曰く「我が來るは義しき人を招く爲にあらず罪ある人を招きて悔改させんが爲なり」と嗟悲ひ哉吾人皆罪惡の中に沈淪せり是を以て眞理を悟るの靈眼なく是非顛倒冠履其の所を異にせり老子之を數千年の昔にいふ曰く「天下其美を美とす故に美ならずと誠に知言といふべきのみ故に吾人も所謂其美を美として以て眞正の神の眞美を知ず誠に基督の言の如く基督に逆て之を磔殺したる者なり爾來世人は基督教が奸惡なる世人を救濟せんが爲紛々たる批評囂然たる迫害の中に立て而も世運の進步と共に新き生命を養成しつゝ今日あるを致し所以に就ては深く其理由の在る所を考究せずんばある可ず輓近漸く文化の進に從ひ博く東西古今の書を讀むを得るに至る亦何の幸か之に過ぎん余頃日深く感ずる所ありて豐臣德川の兩時代に於る當時の所謂切支丹宗なる者を排斥したる顛末を知悉せんと志し其の史乘を涉獵すると已に數十種の多きに及ぶ隨て得れば隨て錄し以て一大部冊となし以て史筆其人を他日に待つとあらんと欲す固より余の淺識短才敢て此の大任に當るに足らず只其の僅に一端緒を啓發せんと希圖するのみ俯て願くは世上の君子余が志願を贊助せらるる所あらば其の斷篇殘章といへども事苟も當時の切支丹宗に係はるものあらば乞ふ其所在を指示する所あれ敢て余が卑見を陳述すると左の如し。以て識者の是正を俟つ。

其一——信者の套語世人の疑惑を惹起せしことあり

例へば基督の王國を世界に擴張す云云と揚言せし事（基督曰く「我國は此世の國にあらず若我國此世の國ならば我僕我をユダヤ人に付さゝる爲に戰ふべし然ど我國は此世の國にあらざる也」基督の王國とは明かに此世の家國をいふにあらざれど當時文化の尙ほ未だ偏ねからざるを以て其意を誤解せしも亦た宜ならずや）

其二――奸悪なる亂國の世は人其の己の心を以て人を忖度するとあり

例へば戰國割據の代に在ては其の所謂英雄豪傑たる者は權謀術數至らざる所なし即ち親戚朋友と雖も互に相疑ひたる事は申すに及ばず夫婦の愛父子の親と雖も戰略の爲に之を犧牲とするを躊躇せず語を代て言はゞ妻を賣り子を質とし甚しきは親を出して敵地に渡し囚虜同樣たらしめしと少なからず織田、豊臣、德川の諸大家皆な均しく此の權謀を以て其國を建たる者ならずやされば戰略の爲に宗敎を利用せんと希圖する如は武家慣用の常飯のみ古來我邦英雄の盛衰興亡せし跡を考ふるに堂々たる帝室の朝廷と雖も時に或は山門に因て事を希圖せし實例少しとせず遂に大に其跋扈するに及んでは曰く「山法師と鴨川の水張」と德川氏の創業尙ほ參河一揆の爭亂あり況んや其の守成の時に及んでは東叡山を開ひて其事をなす織田信長の怨を日宗に買ふや明智光秀私に之を收攬して其の野心を逞うせんと欲す豊臣秀吉の光秀を亡すや彼の十六門寺の閉門を解き以て其寺領を復す毛利氏は私かに本願寺と互に相因緣せり此時に在て九州の諸大名或は耶蘇敎に因て自家の田圃に灌水せんと試みたると亦た之をなしといはず要は乃ち我に在て彼にはあらざるなり彼の伊達政宗の如きは大に爲す所あらんとせし跡掩はんと欲して益々其の顯はるものなきにあらず此の心を以て人を忖度せば彼の當時の西洋諸國が耶蘇敎を餌として我邦を蠶食せんとする野心ある者なりと斷定して以て其の擧動を疑ひ所謂疑心暗鬼を生じたる者あるは深く怪むに足ざるのみ後世史を講ずる者此に心を注ずんばあらざるなり

其三――當時の文化甚だ幼稚、否な寧ろ文盲にして大に外交上の過失多りし事（本居宣長馭戒慨言の著あり）

戰國の時代文書の權を握れる者は佛徒なりき例へば豊臣氏に僧清韓あり（此人後に鐘の銘を選び德川氏の忌む所とな

り不測の奇禍を買ひ以て豐氏の命數を短縮せり世人于今之を寃とす）德川氏に崇傳ありて外交上の文書に干與す其の爲す處知るべきなり因に記す豐後の僧侶大友宗麟に向て曰く余等今日より爾の世子等を敎育する職務を止めん」と按ずるに當時の俗獨り民間に文字を敎る處を寺子屋と稱せし事實ありしのみならず國主大名の家に在て其の大檀越と稱する處の寺僧は今の大學總長たるが如きの實力を有せしならん故に「今日より世子を敎ゆる職を止めん」との一語は甚だ勢力ある者なりと知らる」

其四――歐羅巴諸國宗敎改革の事ありて其の軋轢甚だしく爲めに新舊の信徒互に其の短を罵り合ひたる事

葡萄、伊西巴爾の二國の商人は天主敎を主張し英吉利、和蘭の船長等はプロテスタントを唱へ商業上の嫉妬甚く遂に讒誣の妄說を增長せしめて大に內外人を害したりき。

其五――當時和蘭と伊西巴爾とは所謂八十年の戰爭漸く治りまた彼の有名なる三十年間の戰亂の最中たりしが爲め海外の屬地にある商人と雖も互に其權勢を爭ひ共に其の相陷擠する事を憚らざりし事實ありき」

其六――外國傳道會社の資金僅かなるを見て大に其出所を疑ひたる事

例へば財を天國に積むてふ深意を悟らず只皮相上より彼の聖師ザヴェリヨ氏が其の印度地方に設立し置ける神學校の資金は伊西巴爾の皇后の手許より喜捨せしが如き事實あるを聞見して必ずしも其朝廷に於て愈野心ある者の如く誤解したりき（或一種の人々は今日と雖も猶ほ外國傳道費の出處を疑ふ者なきにあらず曾て或陸軍の士官某等額を集めて相議して曰く此頃耶蘇敎の事を委しく聞いて見たが彼の敎は中々結搆なる善き敎なりさるにても此結搆なる敎を入費を厭はず態々外國に傳道することこそ益々疑はしき根本なれ是れ正しく外國人の遠謀の深き處ならん云云」と

其七――奸曲の小人中間に在て自己の奇利を謝し其の秘密を隱蔽せんが爲め讒誣の手段を行ひて當時の宣敎師に奇禍を被らせたる事

例へば豐臣氏の時に橋田、原田の二人の如きあり德川氏に在ても中間に在る者某家の賄賂を受けて本田父子に怒られたる事の如き皆其の禍を釀成して之を人に嫁せしめたる

者なり就中葡萄商船の漂流して土佐の浦戸港に着きたるを增田長盛之を奇貨として太閤に申して其の貨物を沒收す其際船長の激怒して問答せし顛末を記して西教排斥の口實とせしとあり蓋し是等は非道中の非道なる處置なりと言はざるを得ず設へば今日我國の商人巨萬の貨物を積載して朝鮮地方に漂着せしを彼國の政府令を下して其の貨物を悉〻く沒收せりと假想せよ其の船長若くは其貨主たる者は必ずいはん我儕歸國の後海陸兩軍に訴へて朝鮮八道を蹂躙せんなど如何なる激語をも發しかねまじきなり若し此激語を一々數へて其の不禮を咎め我國に仇する證據十分なりなどといふ者あらば人はた之を何とか言はんされど豐臣秀吉は實に此事をなせしなり或書に曰く市艘百八十隻を以て浦戸より大坂に輸送すと」

其八――豐臣秀賴の旗下殊に基督信者の浪人多りしが爲自然に西國に在る外國宣教師等が其の戰勝を希望し居たりし事或書の記する處によれば長崎の富商某大金を大坂に輸して戰勝の後阿教公許の批準を得んと希望せし云々等の如し

其九――當時戰國の餘万事何事も單純にして深く物事の道理を考究するの腦力なく一時の活氣に乘して神社佛閣を破壞し若くは燒拂ひたるが如きなきにあらず是等の事柄は大に國民の激怒を惹起し其迫害を催したる近因と稱すべきもの也」

其十――我國の僧徒が生活上の關係より起る卑劣なる嫉妬心の事

古來一派の宗教が勃興する時は他教の僧徒爭ふて其宗論を發揚するは至當のことなれども其際必ずしも免れがたき弊事は生活上の關係より起る鬪爭とす此は極て卑劣なることなれども如何んせん此卑劣なる心性より起る鬪爭はまた極て力あるものなり獨り我基督教に在て始めパリサイ字サドカイ派に合してヘロデ黨に結べる實例あるのみならず近くは我が國に在ても親鸞、日蓮の時多少の紛擾なきにあらず是らは深く君子の賤しむ處なれども如何んせん其の實例は東西古今の教會歷史において往々悲慘の事實を見るなり今日といへども尙ほ此の弊竇の中に坐して自ら悟らざる僞して往々破邪顯正など筆太に記したる看板を見る眞に痛まし限きりならずや」

批評

鬼奴を讀む

天知子

淺茅が原に物凄き鬼を思ひ出す霜枯れの中央へ、ぬつとまかりつんでた鬼奴は、元氣能くも陽氣にうい奴の評判を吹かしたり。表紙には、上風さら〳〵と音して伏猪が夢に落す栗の露平を利かしたる優雅なる萩に、思ひ切りて殺風景なる鬼奴の福草履を突掛けさしたるは、一目して、鬼に露平の名を命じ、佛の供を鬼がする底の對照的筆法に巧みなるを現はしぬ、此點は已に早稻田文學の精評あれば言はず。

先づきび〳〵と放膽的の筆法に愕かすは、古帆を洗ひ損ねたる涙六殿の序文なり、此人無名氏を紹介すれども、恐くは洗ひ損ねじと覗き込みたる隅田川に映りし面影なるべし。德川の逆流に膽を實て、癪にさわる世界に胸三寸の溜飮下げた町奴は、此『鬼奴』めが紹介する天職とは見えざりき、思ふに樸直武骨の忠膽を今此恩義知らずの柔軟社會に紹介するを欲せしなるべし。而して最も感服せしは此大腕力者を描きて終に腕力を此小說の器械とせざりしとなり、鬼よ〳〵と唄はれて生涯竟に鬼とならず、五人十人の生首は慥かに引抜く命運持ちながら、虫一疋も屠らで涙脆く今日まで泣通せしは、敵に追れて引返すよりも逃終せたる天晴れ大剛、誠や大勇叟にあり、情けを深く味はずば剛勇も終に大の冠詞を被らすに至らじ、戀愛を說くとて漫りに軟文學と罵り御手前は經文學なるやも氣遣はで力身散らす笑止の者ある今日に於て、此涙脆き情けの泣き奴をシカモ大剛勇として紹介するの勞を喜ぶ。露平實に涙くと八回、而して人に威張ると三回に過ぎず、今にも拔きそうな黑鮫無反の角鍔すさまじけれど、終に一度も拔くとをせず、作者の用心思ふて見よ。

涙六は俠といふ荒膽を探ねて其人情の愛らしき靈光に參詣するの巡禮にして、所謂『ものゝふの鶯きいて立ちにけり』を謠ふの者たり。而して其小說舞臺に於て注目すべき壯觀は、其主人公の對方として折々現はるゝ者に大立者のあるとなり此小說にて譬へば、桔梗殿、香川主水の如き巨物を側面に隱顯せしめて殆んど卷中の人物を壓倒せんとする勢ひあり、斯くて主人公を其間に立たしめて能く最負を維持せしむる所な

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

かく／＼に見ごたへあり。

全篇皆之れ矯激者揃ひと雖ども此俠骨稜々たる粗岩璞玉のセメントとして、能く崇高の美を用ひ併せて又優愛の美を用ひたり、例へば秀麗無邪氣のお國を巧みに操作し短筆能く之れを描きて恍然たらしめしが如き、又鬼奴露平が閑居の所にて「折しも臺所の方に物覆がへりし音もろとも灰神樂たてば、殺すといふも動かぬ露平膽を潰して南無三と叫びざま、俄かに驚いて走行く後姿に小主水ボロリと涙こぼしぬ」の如く、折々腸をえぐるの短句を意外の所に現はして讀者の眼を覺まさしむ、是れ此作者が粗豪を吹かして緻密を胸底に潛むる所、剛强を現はして情涙潸々たるものを瞼に喰絞る所の妙所より來らずんば非ず。

卷中最も憎らしき者は桔梗殿なり而して最も可愛さうなるも桔梗殿なるべし、彼れが互腕にして跂足の延べ難き大不平を漏すに所なく、大矯激家と成りて人界を毒舌に嘲罵し、釆女を立たしめ河野左門を起たしめ、鬼奴の光彩を輝かし、上泉兄弟の經營慘苦を現はさしむ、而して此切れ味鋭き男は絶躰絶命の場合に至れば、頓悟して未練の卑怯卯の毛もなく、本然の我れに返へりて、ほの／＼と明行く空に身を清め衣服を更め、謠曲の一節を小聲に唄ひながら、庭下駄の音しづかにカラリ／＼と響かせて、屠腹の場所と定めし離舍へ歩みゆく有樣、きのふまでの桔梗殿とは生れ變りし如く猛省の俠骨膽を賜露してシヴァルリーの美光を認めずばあらじ。

上泉兄弟は朦朧中のモンスターなり、描くと妙と雖ども露平と組打ちせし時の如き主命なくして刀の笄を袖に縫ひ止めて主人の惡癖を助長し見す／＼忠良を苦しむるに勤めたると、飽まで主と讀者との信任を墜ふせんとするに出ると雖ども、其露平の寓居に來りての擧動と共に、其眞の本性たるやを怪しむ、若し桔梗殿が墓前に腹一文字の美事さを遺して、八十氏川に散るや櫻と世上の人の袖を濡さずば、此兄弟は正に第一の憎むべき惡人となりしならん、名家の武道家上泉地下に哭せん、露平が供待ちの力曳きと共に少しく書き過ぎたるの感なき能はず。

香川釆女の人物は今許する迄もなからん『憚りながら文なき武は世に相立ち申さず、禮なき意地は人を服する能はず』と述べたる秀句は、充分釆女の人物を現はし併せて作者の觀念

を慕ふ、武士の沈靜恭禮の勇武は今日の青殿原に見せてやりたし。河野左門も亦釆女に劣らざる深慮剛骨の人物、能く一諾を重んじて釆女復活の作者が重寶と成りしの勞を謝す。玉江は固是れ深窓の一可憐女、淺弱の戀想未だ男子を動すに足らず、大早計にも戀歌を贈りて終に小主水を走らしたり、小主水は其心膓も亦釆女の子なり、優形の男子と雖ども常に露平を敎えて人物甚だ見るべきものあり、豈軟骨男子として見るべき者ならんや、此作者の困苦は這般の人物を描く時にあり、此二人は今日にては先づ小説的好對手に非ずと雖ども、泣ても笑ふても竟に弱きは戀の癖なりけり、香川家代々の菩提所、わけて小主水が石碑におり〳〵鋲打の女乘物しのび通ふてといふに至て、始めて玉江が美想の好手腕を見る、小主水が寓居後は何となく弱き井筒女之助を見るの感あるも不思議ならずや。

此無名氏の鬼奴は到底涙六殿の奴の小万に及ぶ可くもあらず然れども其發端の三頁は實に經營困苦の蹟見へて、本卷の價値玆にあり、短文能く奴を生かして當時の眞相歷々と現はれぬ、總て耳を尊ぶ今日に於て人々名目に汲々とし、身柄を衒ふて膓の腐るに恥ぢず、那んぞ奴の賤しきを知て其心膓の高節正義を知らんや、蓋し這般の小説が物珍らしく賞贊せらるゝの不幸を悲しみ、又愛好せらるゝの幸福を喜ぶ、果して時勢の寵愛児なりや將た鬼ッ子なりや、吾れ未だ之れを知らず。

雜錄

紅蘭詩集を讀む（下）

攝洲神戸　泣血生

余は婦人として浮華ならず、氣格高尙にして、隨分一世を改革するの氣慨を有し、而かも「優柔淸婉」涙あり、情あり、ホームの懐つかしさを味へる紅闌其人の如きを欽慕するや切也。

○○○○君見ずや、紅闌伯兎伉儷の睦まじかりしを。

賴山陽嘗て伯兎著はす所の西征詩に序して曰く「伯兎淸嚴、嗜詩如命、其婦亦解吟、夫妻相携、囊書槖筆、編遊西南山水、

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

適意輙留滯、獲古人一集可意者、輙枕藉之、婦報饔添衣、不顧云々と。渠は此の如くして海内を浪遊する事殆むど二十年、足跡到ちざる所なし。讀者幸ひに渠が客中の所作に係る鼓半起烹粥思君吟坐寒の詩を讀めば、如何に渠が夫子に對して同情分愛の心に厚かりしかを知る可く、又た江戸客中作る所の左の詩を讀む時は、伯兎戯に賦する所の、遊蹤歴歴幾山川、破費草鞋也可憐、又是旅庖煙不得、脫君裙釵扱君鈿の詩と對照して、夫子時に遇はず、蹉跎落魄、殆むど糊口に窮すと雖毫も之を呟かず、益々身を獻げて夫と苦樂を偕にする貞心無双なるを知る可し。其詩に曰く、

客居新賃兩三椽竈額多寒稀見煙反舌寧嗔翁子拙同心夙得伯鸞賢林園啼鳥春來也門巷無人晝寂然傭役尖頭臨乞米帬衫送盡扱花鈿

是に由りて之を觀る、紅閨の伯兎に於ける猶ほ孟光の梁伯鸞に於はるが如き乎。而して天は自ら助くる者を助けて、遂に紅閨をして平民的詩人とならしめたり。請ふ見よ。渠が吟詠中には如何に屢ば鍼線、中饋、農桑、自活、淸儉の事が云はれたるかを。

要するに、渠の本領は内助にして吟咏にあらず、吟咏に非ずと云ふは、渠が詩人たるが故に詩を作り、一種の職業の如くに吟咏を事とせずとの意にして、渠の巾幗詩人たるとを否むには非ず。余を以て之を觀る、渠が詩人たる所は、實に其鍼線の餘、齊家の傍、一旦詩心動き、詩興至る毎に、人生の一大樂事として錦心繡腸を吐きしにあり、云はゆる詩を作るよりも詩を生活せしにあり。

翻つて此書の卷首を見るに、星巖先生題字を掲げて女工餘事と云ふ。小野湖山も亦た題詞を作りて其末に曰く「不廢居常鍼黹事兼攻上古聖賢書咲他弄月嘲花伴欲把浮華買令譽」と、蓋し兩つながら渠を知る者の言にして、渠の心を得たる者ならむ乎。

千島號の覆没をいたみ樂府にならひてよめる

戸川殘花

大船はゆたにしあれや、　ひさかたの天津空より、
わだつみの波のおもより、　わがくにゝかへりきにけり。
稻妻のたよりをひきて、　文使のはしがきをもて、

やすらけくけふ歸りぬと、今朝はしらおとづれありき。
世はうたかたか、幻か。
わが夫はかへらず。
わが夫はかへらず。

あづさ弓おしてる月も、西山にをぐらくなりぬ、
明星は光まばゆく、肌寒し、浪の音高し。
ますらをと思へる者も、しきたへの枕にむすぶ、
ふるさとの父母の夢。妻のゆめ。みどり子の夢。
世はうたかたか、幻か。
わが夫はかへらず。
わが夫はかへらず。

とも垣も死にしと告げぬ、父母もなきものと云ひ、
世の人はおぼるといへど、けふもまち昨日もまてり。
いかにせむわが心には、いまもなほ我が夫は在せり。
あはれなり、我夫は在り、みどり子の清きむねにも。
世はうたかたか、幻か。
わが夫はかへらず。
わが夫はかへらず。

みどり子と閨にはいれど、しのぶれば身の毛もたちぬ。
わが夫には玉藻の衾。汝が父は千尋の底。
天地よ、神よ、佛よ、人の世はかくあるものか、
愚なるわが身は知らず、しるべせよ悟入の道を。
世はうたかたか、幻か。
わが夫はかへらず。
わが夫はかへらず。

日の本の國の干城の、ますらをのその妻としは、
思へどもいかにやなさむ、わがこゝろ心の中は、
狩人にうちもらされし、わか鴨のつがひはなれて、
月になくおもひなりけり。月になくおもひなりけり。
世はうたかたか、幻か。
わが夫はかへらず。
わが夫はかへらず。

歳末の感

ふみ子

きのふは今日の昔となり、今日は又明日のきのふとなる。烏兎の句に西に射し東に出で、宇宙は寸時も其機能を止むる事はなきに、地上に載られたる我等人間は如何。今日は昨日よりも幾何の新思想をか得たる、去年よりも今年は何等の利益をか世に與へたる。顧へば一年三百六十有餘日、空々寂にとして何事も爲すなかりしに均し。况んや其中の一日二十四時毎の成績に於てをや、詮ずるに日出て起き、日入りて眠り、饑て食ひ渇して飲み、飲まむが爲に奔り、食はむが爲に勞し、或は名譽に權勢に、忙々匆々飲食衣住と利己とを以て纔に其生命を保ち來りたる外に、何の爲したる事なくば、天地に對して何等の辭あらむや。而して斯の如きものが人類多數の状態にてあらむには實に歎くべきの至なりとす。今や我明治廿五年といへる歳も、既に終らんとして剩す所は纔に數日のみ。されば此一年中に於て、我四千万の同胞は、打集りて何事をか爲したりしやといふに、先づ政治上に於ては、新年第一の劈頭に於て、民吏の爭に血を流し、幾多の人の生命を斷ちたるあると、其他は議場內の、紛々擾々を聞けるのみ。詮する處民吏の小紛爭にのみ日を送り、民力の如何に休養せられたるをも、地租の如何に輕減されたるをも、三大自由の如何に回復されたるをも聞かず。即ち政府は依然舊政策を改めず。民黨は彼富士川の水鳥に驚ける平氏の如く、羽音に耳を欹てつゝ怖々に遠征するを見るのみ。去らば其教育界は如何に。音高きは大學總長の交迭と、教科用書檢定上の醜聞のみ其他は學校の增減、教員の進退位の些事に止まりて、未だ一先生の德行弟子を感化したるとも、何校の風儀改まりたるとをも聞かざる如し、其他農工商の諸界何れも著しき公利公益を與へしとを聞かず。是等悉く予が狹見寡聞に基くのみにはあらで、眞に然るものゝ如し。婦人社會の出來事に至りては、殊に寥々特筆大書すべきものあるなし。四千万人共同の成績にして斯くの如し。况んや一個人の事業に於てをや。稀には國家の前途を慮りて、三更眠り得ざる義人もあらむ。又國民の敎化に學理の研究に寢食を忘るゝ人もあらむ。其他同胞を益する大著述に、山野の開拓に、孤兒養育に、或は又窮民の救助に其他種々の事に思を勞して、或は之れを爲し、此年を徒

らに費さゝりし人もあるべけれ共、概しては自營の外に何事をも爲すなかりしもの多かるべし。斯くして年逝き月去らば、人生一期中何の爲すとなうして終るとならむ。蠢々予が如きもの素より云ふに足らざれど、顧て此一年中の成績を思へば、實に何の爲したる事もなく、何の得たる思想もなし。今若し不幸にして我命數今歳にして盡るとあらば、予は生涯何の爲すともなかりしといふのみを以て予が歷史を終らんとはするなり。嗚呼一歲の怠りは一日の怠りに基き一日の怠りは一瞬の怠りに因る。而して此一瞬の怠りなるものは、積んで遂に一期の歷史を、爲すなきの裡に葬らしむるの原因となるものなるとを思へば、人は實に一瞬時間をも空しく費すべからざるものたるを知るに難からじ。年々歲々歲末に際しての感は自他共に斯く思ふと切なり、然れ共歲の更ると同時に此感慨をば打忘れて再び無心無意に流るゝと多きものなり。願くは此感を深く心に記して、一歲の末に一年中の行爲を顧み、而して其爲すなかりしを悔ゆるとなきやうに、一期の終りに臨みたる時に於ても亦、返らぬ悔を貽さゝるやうになし度ものなり。

小說

富貴

幸福（一）

機の屋綾織 作

「イギリス、フランス、獨逸、イタリヤの名ある詩人達の筆に遺されたるさま／＼の歌や物語の長の旅路をめぐり來ぬ、優長なる倭歌幽玄なる元祿の十七文字をも亦片端は伺ぬ。或は冬の夜半に爐の火も消ていと寒ころ、或は黑鐵も溶くるばかりの夏の眞晝をも厭はで勉め學びたるが今は業も卒りて明日をかぎりにこゝを去らんとす、五年のながき月日を送りにし學びの窻を立ちいづるはいとも名殘り惜しき心地ぞする。

我は絕ず富貴と云ふ望にはげまされけり、この願の火のやうに燃えて片時も消ゆることはなかりき、我が今日かく幸を得たるも是がためにぞありける、——我は圖らず貴人の武人に知れぬ、我は間もなく伯爵夫人と呼ばれん。なべての今の世の若者はみだりがはしくざればみて耦るゝをだに厭ふに伯爵はいと重／＼しき人と爲にて叉よく我を知れり、これぞ我

が上もなき幸なりけり。最早我が望みは足りぬ、今よりは又筆を採り美はしき文字多くつくりて千歳の後までもいみじき薫を殘さんとぞ思ふ。」

折しも訪ひ來し人ありと知せを得たれば處女は手燭に火を點して出でぬ、庭にのぞめる長き廊下を通りゆけば許多植ゑ込みたる樹々の梢は影をさしたり、向ひに見ゆる應接の間には燈火の光見えて晝の如き月の光は白き壁の片隅を照せり。應接間に待ちし若者は處女に向ひて云ふ「君はめでたく學びの業を卒へ玉ひて早や婚禮の日さへ定まりしと聞し、げに我が身に取りてもいと榮あることなり。」「君も亦撓みなく勵みて世に出で玉はんことをねがふ。」「我も世にいづる日あらん程なく籠を出でゝ翼をのばさんと思ひ居れり、後には四馬の車に乘る日あらん、必ず君が從弟たるに耻づまじ。」「ゆめ此言葉をたがへ玉ふべからず、君が世にいでゝ位たかく祿多く花のごとき人をむかへ玉はん時我れいかに嬉しかるらん。されど我れ思ふに君が旅路はまだ遠く過ぎゆく道の邊には善からぬ友の多ければ君を地獄の道へ誘ひゆくこともあるべし深くこれを恐れ玉へよ。」「我は酒を飲み手を拍ちてたはふれ遊ぶ怪しげなる若者等の群とはうと／＼しくせり、我は心からの友たゞ一人あるのみ、彼は基督信徒なるが其するところ其言ふところ何時にても我を感ぜしめぬことなし、我はかゝる穩かなる者のみを友として交らひぬ。まことに今の世はやんごとなきわたりにも見にくきことのみぞ屢々聞ゆるは古も亦かくありしにや。」「これ等は世の人の妬き心よりさる根もなき噂を立つるのならん。」「さることも亦あるべし。」「我は廣く人を惠み德を施こし我が碑文の上に之れを刻まんとを思ふなり。」「富貴にして名をのこさんことは是ぞ君が望なりき、今半ばに餘りて遂げ玉ひぬ、見玉へ我も亦暫の間に大なる足跡をしるすべし。……いざさらば歸らん時の過ぐるを知らでありき一寸の日晷は一寸の黄金より貴し。

青芝の中に道を開きて兩側には暗きまでに茂りたる木立の間を通りて手燭をとりて歸る從弟を送りゆきしに僕に導かれて來れる軍服着たる士官に來合せぬ。士官は若者と見て、遠藤の君なるが、暫し相見ぬ間に夏の初めになりぬ、休暇にも程近し今年は我方へ來玉へ涼しき居間を貸さん。」「そはいと願しきことなり。」「今しばし話し玉はずや。」「我れ試驗のまだ終らぬ

ほどに忙はしければ今宵は暇を玉へ」とて去りぬ。士官は處女と共に應接の間に入りて云ふ「試驗も終りしと聞きぬ、御身が成績のいと拔んでたりしことを聞きて母上も喜びて今宵御身を伴なひて來よとの玉ひければ亦他よりの歸り途に立ち寄りしなりけり。」「さればしばし待ち玉へ、我は衣を改めて來んとて、嬉しげにいそぎて去りけるが程なく出て來ぬ、士官ともに出でゝ門に待ちたる馬車にかきのせぬ。

士官處女に語て云ふ「ギヨーテ、シルレル、シエークスピアー、我も亦身を此間に置きて靜かに面白き一生を送らんと思ひしに父上は早う世を去り玉ひて我はかゝるほだしある身となりしとをうらみしが今よりは雨夜のつれ／＼にも卷を繙きて聞かん、處女は之に答へもせざりき。

クリスチヤン　（二）

媼云ふ「もはや伯爵はかへり玉ふべき時なるに、夫人は待ちかねて居玉ふならん」とて居間に入りぬ、「はや裝ひは悉く出來玉ひしや君が姿のげに氣高う見ゆることよ。」夫人は手紙を書きつゝ、二人の乙女は傍にて團扇を動しつゝ相語りてありしが來りし媼に向ひて云ふ「君に願ひ事のあり今夫人の書き玉ふ手紙もたせて伯爵の迎ひを遣りてよ。」

夫人は手紙書き終りて媼に渡しけるが暫しありて思ひ付きて云ふ「我このごろ暇なくて遠藤を訪ふとを忘れてありしが彼は如何にしてあるならん。」一人の乙女の云ふ「遠藤の君は一たびも外に出で玉ふとなく日々垂れ籠てのみあり。」「そは心地惡きにはあらずや。」他の乙女の云ふ「否我今日庭を過ぐるとありて窺ひ見けるに君は机に椅りて書讀みてありし。」いざ我れ彼を誘ひいだして今宵武島伯が邸へ伴ひゆくべし、御身達も共に今彼が部屋まで行ん、人を待もいと苦きものなり。」

階をくだりて廻廊の欄干の角にたちて見れば夕日の銅の如き光は名殘りなく消えたれど高き梢にはまだ鳴き居る蟬あり、庭に下りてゆけば木の葉の間にはそよ風おこりぬ。あなたの離れの垣の下なる芭蕉は四方へ帆の如き新葉をのばし窻の中にて書讀む人を半ばかくしぬ。

居間の戸は明け放ちたれば三人は立ち入りぬ。遠藤面をむけて打眺め夫人が裝を疑したるを見て眉を皺はめぬ。夫人云ふ「我昨日も今日も忙しきまゝに君を訪ふことを忘れぬ。かく

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

心を疑して何の書を讀み玉ふぞ、こはバイブルにはあらずや。君はそを樂しと思ふともあるか。」「我は未だ君に告ぐることをせざりしが我は總て身をクリストに委ねけり、此一冊の聖經こそ帝王の位を得たるよりも尊し。」「されば君が先の日の四馬の車に乘んとの望みは。」「こはみな打ち棄てぬ。」「かくして君は是より。」「我は是より唯日々聖經を繙き神の敎を明らめ朝な夕な神に禱りて唯神の前に正しき人とならんことを務むるのみ。」「そは誠にや。我は驚かされぬ。君が知ぬ間にかゝる人となり玉はんとは、されどこは君が心の迷ひなり。」「さにはあらじ、我が富貴の望こそ大なる誤なりし浮世に黃金の家を築て何にかせん。我は日ならず大學を去て我が友の叔父なる博士の傍にてしばらく神學を讀み事に餘ばかり書卷をベルリンへあつらへ之を攜へて我は山里に入らん未だ神の敎を聞たるとなき者どもを敎へ導かん、我が胸の中に蓄ける樂しき生涯を語らば——我が住む山里の耕人又は商人もみな我が打つ鐘を聞てその日一日の業をやめて爺々婆々妻や娘子供までも手を攜へて打連て來るならん、かくて我れ彼等に向て如何に生き如何に死んと云ことを敎べし、又彼等が仕事の暇あるときは相集ひて神の德を讃たる歌を唱ひ共に神の前に跪きて露計りの汚れもなき潔き人とならんとを禱らん、——我はかくして樂しき一生を終へん。」「かく心の定まりたる上は我が如何に云ふとも聞き玉ふことはあらじと思へば又何をも云はじ、されど基督敎はかゝる秀である若芽を枯らして世捨人とはしにけり、我は君が世に出で玉ふ日を自らの事のやうに思ひて待ちてありしものを背仇とはなりぬ、」夫人はかく歎きて又言葉もなかりしが折しも伯爵が歸りの知せありければ乙女等を打連れて顧みがちに歸り去りぬ。

あはれみ（三）

菊月の末つ方月明き夕夫人は二人の乙女と共に庭に出でゝ逍遙し歩行きつ穗の出でたる一叢の尾花のわたりに來て足を止めぬ。「今宵は彼處の離にて燈火の見ることは賓客のあるにや、遠藤の君の去てより永く見えざりしに。」「こは大野の祖父君の今宵此方に宿り玉ふなりと聞し。」「夫人、遠藤の君は如何にし玉ひしと思ひ玉ふ。」「げに彼は何地行けん、今に一たびの音信だになし、彼はクリスト敎に溺しなりけり、見よ後には必

ず悔みて歸り來る時のあるべし、彼はしばしの隙も怠ると云ふとをにくみけるはと望ある人なりしに。」「されば蒸暑き夜など我れ部屋の外に立出でゝ見れば君が書讀む燈火の夜いたく更るまで見えし。」「我も此わたり通るたびにものさびしと思ひぬ、我は別れと云ふものをいと嫌ふなり。」夫人云ふ「夏も亦知らぬ間に去りてかゝるうらかなしき秋は來て尾花の穗は出でぬ、とは七草の一つなり。」「秋の七草は萩尾花朝顔……。」「苅萱藤袴……。」「藤袴と云ふ名は聞きつれど花はまだ見ず。」「されば君に見せん此方へ來玉へ。」彼等又歩み去し夫人も亦之に從ひて行きぬ、老ひたる柊の木下闇にいれば生しげりたる葉の間より月の光のもれ來て下とほる人々の顔を照しぬ。樹陰を出でゝ廣き毬投場を過ぎて又木立の間に入りぬ、木立出れば先きの方に白き塀を見る。「我等を何處へ伴なひゆき玉ふぞ。」「草花をたづねて知ず／＼裏門近くに來ぬ。」夫人云ふ「門を出でゝ眺めん、此處よりは大學の塔の見ゆると思ふ、とは我が五年の苦しみを積みしところ今めゆかしと思はるゝ、最早道ゆく人もなくなりつらん。」門を開きて皆外にいでぬ。「小さき子供の其處なる塀の石垣に倚てあるにはあらずや。」みな近づきて見ぬ、夫人云ふ「こは如何に、破れたる衣を着たる女童なり。御身が父母はをちこち尋てあらん速かに歸らずや、又御身は何處のものぞ。」女童は泣つゝありしが眼を拭ひて人々を見て云ふ「我が家は駒込にありしが父母ともに此春なくなりて頼る方もなかりしに絃弾きて門付する婦の我を憐みて伴なひ歩行しを今日これにはぐれぬ。」「御身年は何歳ぞや。」「今年十歳になりぬ。」「さればまだ如何にしてか自を支へ得ん。」乙女云ふ「貌も見にくゝあらぬを哀れなることかな。」「我等歸りて彼にしばしなりとも支へんため錢を取せん。女童しばしの間こゝに待てよ」と夫人は言葉をのこして皆打ちつれてかへりぬ。

夫人己が居間にいりて錢を乙女等に渡し「何をか彼が弄ぶものにても與へばや」と云ぬ。乙女の云ふ「とみのことにて心當りなけれど是を彼に讓らんか。」他の乙女云ふ「夫人は知り玉はじ、こは長屋に住む人の幼き娘のいとらうたきが明日は遠き國へ旅立つと云へば我等相はかりて斯く此小箱の中に樣々の玩弄物を封じぬ、小さき人形、造り花、美はしき糸束、絹切などを入れぬ。」「そはいとよからん、」そを彼にゆづりてよ。」

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

ほどなく乙女等は歸り來て夫人に告げて云ふ「彼はいとも嬉げなる面持にて涙を拭ひ許多度我等をかへりみて去りにし。」「アヽ哀れなることかな今宵まづ何處にぞ宿を求めんとすらん、最早神無月にも程なければ空も日に寒くのみなりゆくなり、霜置き北風つよき夜などにかゝる幼きものゝ如何にすべき、間もなく彼はこゞゑ死て道側に打倒れ草葉の露と消んこともやあらん、我等と同じく人と生れてかゝる憂き目に遇ふことのあはれさ。………我は彼を助けて得させんか、是ぞまことに我身に容易き業なり、又かく人の命を救ひ惠を施して置けば我が後の日の幸ともなるべし、御身等いま一たびゆきて彼をつれ來れ、まだ遠くはゆくまじ。」かく言ければ乙女等は再びゆきてかの女童の跡をたづねて伴なひ來たりけり、彼を椽先に立せて夫人之に向ひて云ふ「御身もしすなほにして我に仕へんと思はゞ我家にて養ひ得させんと思ふ。………御身はいかに答ふる。」女童は物をも得言はで唯打ち泣て居りぬ。夫人又云ふ。最早冬にちかし師走になりて凄き寒空にも誰か御身に宿借ものあらん。」乙女云ふ「かゝる惠み深き人の世に又とあらん御身はつゆ計りも夫人の言に背くことなくて仕へよされば我れ御身がために證人に立たん。」他の乙女云ふ「僅かにても僻みたることあれば再び御身を追ひ出し玉ふべし。」夫人云ふ「かく心得て永く今日をな忘れぞ。最早十時なり、伯爵がかへり玉ふべき時にはなりぬ。御身等彼を今宵何處になりとも臥させてよ、明日の朝まだき衣着かへさせて髮を洗ひ鬟美くしく結ひてやらん。」

憂ひ（四）

群鴉啼くなべに今日もまた入相とはなりぬ。今宵は人もあらずつれ〴〵のまぎれに夫人はオルガンを彈んとしたるがにはかに打止めて云ふ「否、かくたのしげに物の音などを弄ぶ時ならじとて」居間の戸明けて出でぬ。風はいと寒し昨夜より降りつゝきたる雪は尺あまりもつもりて止たり、空の色は淡黒色に雲むらなく閉ぢ渡りてものすごき夕ぐれの色なり、しばしながめ居て居間に入り机に倚りて頬杖をつきてありき。今は日も名殘りなし暮れて晴くなりぬ。戸をたゝく音あれど夫人答もせざりければ開きて入り來りし女童は大なる卓子の前の椅にのぼりて上に据へたるランプの蓋を兩手にてはづし

火をともして去りぬ。夫人は顔を上げ机の上にみだれたる書卷を見て一つを繙きて詩人のめでたき筆の力もあらば我此憂をしばしなりともまぎらせん」と云ひぬ、二ひら三ひらを讀みてやがて又之を閉ぢ机の上に投げて「今はこの美はしき文字も我を慰むるに足らじ。」

かくてまだ十時の前に夫人いと寂しければ臥戸に入りぬ。枕に就きたれどしばしもまどろまれざりき、眞夜中に又起き出でぬ。戸を明けて見れば空は晴れ渡りて月の色は銀の如く見渡すかぎりの家々の屋根は大雪につゝまれぬ、風少しく起りて庭の梢につもれるを拂ひ落す。内に入り爐の前なる椅子に倚りぬ、亂れ髪かきあげもせで打凋たり、物思はしげに頭をかたむけ兩手を膝の上に置てありしが手巾取出でゝ涙をぬぐひぬ、爐の中の火は半ば炭になりて自から碎け落ち明く夫人が顔を照しぬ。

この時人の來れるあり、かゝる眞夜中に何人ならんと思ひて戸を明けて見れば家に仕ふる乙女なりし「我れ今まで大杉少將のがりにて骨牌を圍みて遊び居けるが少將より音信ありて戰は今を酣なりと、されど少將達みな恙なくてあるとありき、されば我が伯爵にも亦必ず恙なきことと疑あらじ。」「さなりしや、かく聞けば我も大に落付きぬ。」「今宵はもはや二時をすぎぬれば眠りに就き玉へ我も歸りて眠らん。」

このときおどろ／＼しく戸をたゝきて馳入りしものは他の乙女なりし「夫人、今一人の軍人の來り戰塲より伯爵の使ひに來たりしと云ひぬ。」「そは手紙にても持たるか。」「我れあわてたるまゝに何をも問はざりしが彼は夫人に遇んと云ひぬ。」夫人かく聞て何事ぞと思ひて速かに衣を改めて出でゝ逢ひぬ。

軍人と云ふは身丈いみじく高く日にやけたる大男なり、塵に汚れたる服のところ／＼裂けたるは觸れて飛びすぎたる丸のためにや。伯爵が母、弟などより家に仕ふる者みな出て來りて彼が前に立ちて其顔を仰ぎ見て言ふよを聞けば「我は伯爵に隨ひ戰に赴し者なるが今使に來ぬ。事短く語らん、聞玉ひし通り今度の戰ひは何れの勝にならんや疑はしき程なり官軍の兵も半は敵の刃にかゝりぬ。去る月の末なりき、我等は道を知ぬ山路の戰に打つかれけるが流れ丸は計らず伯爵か左の胸を射透しぬ。醫師の力をつくしたれど甲斐なくて空しくなり玉ひし、今はの時に我に向てこま／＼の言傳と共に片身をさへ

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

托け玉ひぬ。大將にもいと哀れに思ひて此度都へ急の使のありければ我を撰びて之に充て夫人に逢ひて伯爵が遺言をも精しく傳へよと仰をうけて來たりしなり。

時事

○超然內閣

既に議會を開き、而も閣僚に非凡卓等の總攬者なくして、以て超然內閣なるものを組織せんとす。其成すと能はざるは勿論の數なり。然れど、兎に角、之を試み、維持して今日に至り、性急の癇癖を止めて、諄々說明し、至誠に似たる情實話しを傾むけて、以て議員の舌鋒を鈍くせんとするの處置は、太はだ巧妙なりと言ふべし。新聞紙法案の委員が挫折せしも亦恐らく此の手段に掛りてなるべし。條約改正上奏案の議事も、秘密會議にせんとを要め來る。察するに、外務大臣、其困難の內情を打明けて、議員の一顧を促がすものなるべし。此類手段の戰法は、議員が最上の迷惑とする所ろなり。一意に慷慨すると能はざる事情となりて、追々泣寢入に歸し了るとなからずや。現內閣に策なしと云ふは、即はち策ある也。此策や、實に伊藤伯の氣質より生れ來りし實子也。

○公人の禮

今の記者及び議員、何んぞ士人の禮を知らざるの甚しきや。近日の議場內及び新聞紙上、馬丁車夫の相罵るが如き言語に類するの辭頗ぶる多し。而して、如此き辭を吐くを以て、壯なりとするもの甚はだ多きが如し、雅量を欠く殆んど極まれりと言ふべし。彼等は、日本の武士をすら知らざるもの也。

○板垣自由黨總理の演說

去十七日に於ける、板垣總理、三條例改正案に對する委員說辭讓の演說は、其衷情を流露せしめ、極めて好くその人物を表明すと云ふ可し。誰か、此人の赤誠を疑わんや。然れども、一部の改革は、全躰の革命に害あり。名分の問題は、實利論と同日の談にあらず。今に於て、政社聯結の禁、發行停止の處置等を是認するは、代議政躰治下に斷じて寬假す可らざる也。此は、實際利害の問題にあらず、正理公道の問題なり。實際に大不都合なしと云ひて之に讓らば、何故、之を全廢せざる。敵に名分を許して、多年專制の處置に口實を得せしむ。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

吾黨は眞平民黨の爲に深く惜むもの也。

○衆議院侮辱事件

是れ發行停止の必要を悟らしめんとしたる政府の苦肉策なりと言ふものなり、何れにせよ、一笑に附すべし。たゞ、衆議院が、日々新聞の如きを相手にして、堂々たる決議を爲せしことを惜しむ。

○羅馬字雜誌

遂に廢滅せり。外山君、當年の漢字破演說の勇氣何處にあるや。

○違憲なりとの決議

狩獵規則を單に違憲なりと決議するのみは、何の事ぞ。衆議院は、違憲の有無を判斷すべきものにあらず、之が爲めに更に一猛進し、大ひに內閣に向つて問ふ所なかる可らず。然らずんば、其決議すでに違憲たり、亦何等の効もなく、反つて其無力なることを示すに於て止む。遺憾何んぞ堪へん。此の一事、むしろ長髮子の主唱せし所ろを可なりとせずんばあらず。

○山縣伯

去十七日、山縣伯、大隈伯を早稻田邸に訪問す。河野子も亦た同日書を大隈伯に送りきと傳ふ、此等の事、尋常交禮の意味にして、他に故なしと解するものありと雖ど、同ず可らず。政海昨年の模樣少しく異風を促がし來る(廿二日記)。

○寧ろ好む

自由黨、改進黨、近來何となく快然たらざるの狀あり。吾黨は、山縣大隈二伯の會合を聞くことを好まず。板隈二伯何すれば早く一接面、一握手の勞を取らざるを奇しむ、たゞ此の一事あらば、民黨の意を强ふせしむると他に類なけん。

○鐵道の議

鐵道會議の進步中々に捗どらず、果して當期內に決議するに至るべきや否や。各地より來集せる期成委員の運動驚ろく可し、之が爲めに消費する金莫大なりと傳ふ。あゝ、黃金と情實と地方的感情と相合して、長年の文明國道を何如に配置せんとするか。此際或は、鐵道不急の問題を發するものあるに至る。歎ぜざる可らず。

○福澤門

貴衆兩院の議員にして、三田慶應義塾より出世の三十六名

去十八日に於て、福澤先生を招待す。此門出身の議員、大學卒業生の議員たるものより多し。先生の得意察すべき也。

○德育

傳ふらく、慶應義塾、舍を大森邊郊外の地に移し、塾内取締を一層嚴にして、大ひに德育に注意すと。福澤翁、近年漸々德育問題に熱心し、往年、娼妓上人同功說を說法したるの時と同日の談にあらず。思ふに、社會は、翁に迫りて、今后追々に其德育法に注意せしむるなる可し。之れ實に社會の眞勢にして、而して其目じるしは、時事新報社說の變移するにあり。

○渡邊洪基氏

解散后三日直ちに内意を電通せられ、身未だ東力の天に向はざるに、福澤翁をすら煩わして早く撰擧に奔走せしめ、辛ふじて僅々たる多數にて當撰したる渡邊洪基氏は、國民協會近來の傾向に同伴すると能はざるか、近日遂に辭表を出せり。

○河野廣中氏

當年の意氣既に磨滅し、既收の人望に籠囚せられ、河野君の英氣前年と同じからずと云ふものあり。

○順序あり

日本人の壽命は一年とならんとす、毎年々々國會の模樣を見るの外、眼識を遠きに及ぼすと稀れなり。誰か、政治社會を腐敗せりと歎く、敎育社會すでに腐敗せるの日、政治界何をもてか淸まん。何んぞ亦獨り敎育社會をのみ歎く可けん、宗敎界既に濁るの日、敎育界の淸まざるは當然なり。夫れ、改革は宗敎界に初まり、次に敎育界に及び、而して后ち政治界に及ぶ。今に於て先づ政治界を責るものは、經世の大理を辨ぜざるもの也

○興隆佛法會

加賀國橋立の富豪久保彦兵衞氏、私產の若干を擲うちて本山布敎に盡力せんとて、此度び興隆佛法會を設け、東本願寺の前執事篠原順明上人を請ふて會主に戴たき、小栗栖、南條の二氏にも入會を要めたりとぞ。此の會、尋常の會の如くならず。吾黨は眞の佛法の爲めに賀して止まざるもの也。

○迫害及世の要求

迫害あらずんば、眞光を發揮すると難し。今の宗敎界の振わざるものは、外界の壓迫緩散なるが故か。基督敎界の如き一

度天下の好遇を受けてより俄然して勢威挫けたり、今は世態に顧みて大ひに自ら奮はずんばある可らざる也。

寄書

現今青年會の流弊

山月子

(一)滔々たる青年會

一夜の間に筍の生ずるが如く、多くの青年會は此處彼處に起りたり、曰く鄕友會、曰く同懇會、曰く研究會、曰く何會、其數枚擧に遑あらず、彼等が集會の目的那邊にあるか、規則書は說明して曰く、智識を交換し、親睦を厚うすと、集會の實益抑も幾何ぞ、試に之を觀へば、時間既に過ぎて會員未だ來らず、來れる者は、或は碁を圍み、トランプを鬪はし、花を弄ぶ、或は益もなくたわいもなき事を語りて笑ひ、或は婦女子の惡評をなす、既にして會員漸く集り、席を設けて並び坐す、一脚の机、毛氈を蒙むる處、甲乙丙丁交々立ちて瀬唇輕く演說す、日沒し會散ずるに至れば、三々五々、相分れ相携へて、或は酒樓に飮み、甚しきは遊廓に眠る、誰か其案外なるに驚かざらんや、集會斯の如くんば、却て益なく害あることを知るべし。彼我の演說談話は、或は幾分か智識を交換することを得べし、然れども之と同時に、輕薄と輕薄、腐敗と腐敗を交換することあるを知らざるべからず、輕薄の親睦、腐敗の親睦、其結果果して如何、思ふて此に至らば、何人か爲めに戰栗せざらん、嗚呼第二の國民たる、而かも將來の先導者たるべき青年學生をして、腐敗の臭兒たらしむること勿れ、吾人は切に此等集會の反省を促がし、併せて愛國識者の注意を喚起する者なり。

(二)基督敎青年會

吾人は滔々たる青年會につきて殆んど絕望せり、目を轉じて我が基督敎青年會を見れば、誠に喜悅に堪へざるものあり、彼等は兄に角親み助けて、傳道に、敎育に、社會運動に、其力を盡せり、蓋し德義は萬事の基礎なり、世の青年會が腐敗に傾くは、實に此基礎なきが故なり、而して我が基督敎青年會が、能く美事をなし、善擧をなすは、衆德の本なる基督を信ずるが故なり、即ち基督の力に由るが故なり、『山の上に建られたる城は隱るゝことを得ず』基督敎青年會は、今や衆目の視る所、衆指の指す所となれり、吾人は今日に於て其會の深く自省、自重、自任せざるべからざるを感ず、

何を以て自重自任すべき、此問題は吾人が今之を陳述するの要なし、たゞ青年諸君にして、目を擧げて四圍の光景を熱視せば足れり、然らば何をか自省すべき、請ふ吾人をして少しく曰はしめよ、

このごろ余は二三の青年會に臨めり、余は其凡てに於て感心せり、たゞ一の憤慨と哀歎とを催せしものあり、そは何ぞや、青年中、往々輕薄俗臭の人の一きわ目だちて見ゆることにあり、余は一青年が、或る會上に於て、容を正して『青年會は嚴肅の集りをなす時間なかるべからず、然らざる時は漸次腐敗に傾くの恐あり』と述ぶるを聽きなり、而して之に次で或る青年が、口を開きて『此會はなるべく窮屈ならざるを要す、信者の集りなれば、まさか遊廓の話などする者もなかるべし、たゞ茶菓を喫して、雜談雜話、懇親の實を擧ぐべきなり』といふを聽けり、又他の席上に於て、最も眞面目なるべき場合に滑稽を弄し、獨り開けたる信者と氣取れるが如き人を見たり、其他は類似の事多ければ、省きて載せざるべし、然れども此等の事と、其會の損損とに由りて、余は道の爲めに悲しく思へり、親睦とは何事ぞ、何の爲めに、何を以て、親睦するぞ、親睦の目的は親睦其ものに非ず、親睦することによりて、互ひの信と望と愛を增し、以て內、德を建て、外、善を行はんが爲めに非ずや、然らば則ち其樂むと、其語ると、凡て神の前に於てするものなることを忘るべからず、俗物の輕辯、俗物の交際、何を以てか其會を盛にすることを得ん、斯の如くせば、必ず其會は分裂を來し、衰微を招くべし、パウロ曰く『義と不義と何の侶なることか有ん光と暗と何の交ることか有ん、キリストとベリアルと何の合ことか有ん信者と不信者と何の干ることか有ん、神の殿と偶像と何の同きことか有ん』と、世俗的の交りを以て信者の集りを一にせんとする者、輕浮の言行を以て義人の心を繫がんとする者、若し沈んで此語を三思せば、必ず悟る所あるべし、

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

昔しはヨナタン其命の如く愛する所のダビデに謂て曰く『汝さ我さ語れるこさについてはエホバ常に汝さ我さの間にいませ』さ、是れ神聖なる、美麗なる相愛にあらずや、二人の間斯の如くならば、其愛堅くして自他無差別さなるべし、三人、四人、十人、何十人の會、各々斯くの如くなるを期せば、其愛堅くして何物も破ること能はざるべし、ヨハネ曰く『神は即ち愛なり』さ、吾等の愛は愛の泉源なる神に由りて一なることを得、即ち神を愛する者は兄弟を愛する者なり神を忘るゝ者は兄弟を忘るゝ者なり、這般の道理を察せずして、妄りに交際のみを重んじ、流俗に化し去らるゝ者あるは、何たる遺憾ぞ、請ふ地の鹽をして味を失はしむること勿れ、外に棄てられて人に踐まるゝ者さならしむること勿れ。

(三)青年の責任

『噫エルサレムよエルサレムよ』橄欖山頭の主が愛涙、愛聲、今猶見るが如く、聞くが如し、嗚呼主は今も在せり、愛の主は、現時の腐敗に憤り、同胞の爲めに涙を流し給ふを信ず、抑も此主が憤さ涙さを代表する者は誰ぞや、吾人青年、殊に基督教徒の青年に非ずや、吾人何を以てか惰眠を貪り、輕薄、浮靡の言行をなすべき、今日は實に日本の歷史を一轉化すべき時に非ずや、將來の運命は、ただ青年の心によりて決するものさいはざるべからず。

吾人は漠然さ青年會に向つて注意を請ふよりも、青年諸君個々に向て注意を請ふの適當なるを信ず、故に眞實率直に、思ふ所を陳述す、親愛なる青年諸君よ、望むらくは其心を廣うせよ、卿等の運命は日本の運命に關し、日本の運命は東洋の運命に關し、東洋の運命は世界の運命に關することを記せよ、狹き集會の席上に於て、神の子たるを忘れて、俗流の交際を樂むが如きは、誠に耻かしき次第ならずや、吾人は書して自ら戒め、併せて我が愛する青年諸君を戒む。

煙草の利害

下毛　蘇水生

青年諸君及幼年諸君にして喫烟をなすもの益多きを見る諸君は其害あるを知らず只一時の慰みさして之を用るならん然れども絶へす之を使用し居るときは遂に習慣さなりて廢すること能はざるに至るべし故に其利害を記して諸君に呈せんさす。

煙草の利害を記述するに當り煙草は何年頃我國に來りしかを說明せんさ欲す西曆紀元一千四百九十二年今を去ること四百年前歐洲人コロバスさ云ふ人亞米利加大陸を發見し其后九十五年（西曆紀元一千五百八十七年）を經て英國人ラレーさ云ふ人今合衆國內なるバァジニア州より其種を英吉利に持ち歸り蕃殖せしより歐洲各國に傳はり終に皇朝慶長五年荷蘭人始めて我國に來り互市を開き慶長十四年に煙草の種を吾邦に持ち來り之を人民に植へしめ之を吸ふことを敎へたり然るに漸次盛大になり全國到る所さして煙草烟及煙管製造所のなき地なきに至れり。

喫烟の旺盛に赴くを憂へ慶長十五年十月將軍德川秀忠公喫烟を禁したり然れども其効なく又將軍德川家綱公寬文七年三月に於て之を禁したりしが其効更になく其后益盛大に赴き遂に貴門紳士の行はるに至れり。

喫煙の吾人に及す利益は幾何ありやさ云ふに只一二過ぎす熱心に事業に從事し倦遠を生ぜし時吸烟すれば鬱屈を慰め又一時（少時）の勞動に堪ることを得るものにして茶、咖啡の如く一時精神を爽快ならしむるの益あるのみ。

煙草の害は煙草の成分を知るを肝要さす故に煙草中に含む有害成分を撿するにニコチン、ピコリン及ピリヂン等あり其含む所の量は一定ならすさ雖大抵七乃至八を含む又卷煙草二本の中に含むニコチン毒を採り之を人に呑ましむる時は速坐に死すさ云ふ我國人の如く烟を嚥下するものにありては其烟毒胃の粘膜を刺衝し慢性胃カタールを起し且つ腦及ひ五官神經に害を及すものさす。

以上の諸害は學術上のみならず實地に於ても屢見聞する所なり依て其事實の二三を記せん。

亞米利加合衆國オレゴン州上院議員リヰークストンの愛子ヂヨルヂチは十一才の時より喫烟せり父母は深く之を憂ひ絶烟せしめんさ欲し一千弗を與ふるに依り禁烟せよさ云ひしも禁烟せず喫烟料を增加し一日に八十本位の卷煙草を要するに至れり然る內に順次肉落ち血色黃色に變じ眼睛血走り遂に死去したり其后數刻をて全躰黑色に變じ眼も當られぬ姿を呈せり之を解剖せしに心臟に多量のニコチン毒を受け其方爲め死去せりさ鑑定せりさ云ふ。

我國陸軍の士官にて喫烟弱視症に罹り東京衛戍病院に入院治療を受けて全治せり保利醫學士の說に依るに來た我國喫烟弱視症に罹りし者の統計は見されども之を統計する時は隨分澤山あることならんさ云へり獨逸國に於ける喫烟視症の統計は二百四人の球外視神經患者中四千五人はアルコール及煙草の複合中毒二十三人は純

粋なる煙草中毒其他の百三十六はアルコール及其他の原因に依りて發生せりと云ふ。

一女子の齦齶の疼痛を治せんとて煙草の脂を齒腔に充塞せしに頓に失明し人事不省となり醫術を施して漸く醒覺したりと云ふ。

米國エール大學の躰育教師博士ステーソ氏は過去二十五年間生徒の健康發育を觀察し非喫烟者は喫烟者に對して非量百分の六十六の增加あり又身躰の重量には非喫烟者は百分の二千五の利益ありと云へり。

過日米國合衆國より渡來されたる万國婦人禁酒會教育部々長イリノイ州婦人禁酒會々頭ユニオン、シクナル雜誌主筆者ウエスと孃の演說に喫烟は手振へて直線を引く能はず故に合衆國なる海學校にては喫烟者の入校を禁したりと云ふ又青黄赤白等の色を充分に見解くるを能はず故に鉄道局にては喫烟者を採用せずと云ふ亦ハーバート大學にて入學試撿を施行せしに非常に落第者多く其評合は女子百人に付二十二人男子百人に付五十五人なり男子は女子より優り居るは通常なるに如何にして此の如き割り合なるやと云ふに能く其原因を探究せし所煙草の爲なりと云ふ（米國婦人は喫烟せず）

此他煙草の中毒に原因する症狀は不眠症、思考力衰弱、心動不正、時々脉搏の不正等其他枚擧に遑あらず。

以上の利害を比較するときは害あるか利あるかは一讀の下に明かなるべし又喫煙者諸君は我々多量を用ゐざるを以て善なしと云ふならん此說たるや其謬見も甚しと云ふべし古人も云へるにあらずや塵も積りて山となると諸君は毎日少量宛喫煙すれば少量の毒は諸君の身躰内に殘滑し遂に躰内に溺曼して死去するに至るべし諸君は將來社會に立ちて大に成すべきの事業あるにあらずや然るに煙草の小利に戀々として此一大目的を遂するとを得ざるは遺憾ならずや。

片々

可愛子編

●東京基督教徒青年會　は去る二十日午後六時より、夜學校閉校式並にクリスマスを執行せり、來會者無慮百餘名、同會幹事丹羽清二郎氏の演說、生徒二名の英書朗讀、及び演說あり、次で江原素六氏の青年當時の實歷談あり、讚美歌を以て此式を終へ、五分間休憩の後クリスマスを執行せり、洋々和樂、十時前に及びて散會せり、當夜は外國婦人一名、日本女子四名を見受けたり。

●東京英和學校基督教育年會　は同校の設立と殆んど同時に成り立ちしも、其名稱を冠し組織的に整頓せしは明治二十年九月なり、爾來益隆盛に赴き、現今八十餘名の會員と五十六名の贊助員を有す、同會の務むる所は、會員相互ひに基督教徒たる友誼を厚うし、且學生間に基督教を擴めんとするにありて、此目的を遂せん爲め、祈禱、勸話、演說の會あり、又同會には、宗教、學術に關する內外の書籍數百部を藏し、會員に借貸閱覽するとを得せしむ、書籍購求代は毎月各會員より會費一錢づゝを徵集せしものを以て之に充つ。

●慶應義塾ユニチー倶樂部　は義塾學生有志の立る所にして、其目的は實踐躬行以て自己の德義を進め、且世間德風の頽敗を救ふの道を講じ以て人類共同の義務を全うせんとするにありて、毎週一回集會して道德社交上の事を研究し、毎年一回大會を開くを例とす、會長はユニテリアン派のクレイ、マッコーレー氏。

●光鹽青年會　同會は本年四月前までは、東京府尋常中學校基督教青年會と稱せしが、新校長に至りて、前校長と異なりて青年會の擧に反對し、加ふるに東京府尋常中學校てふ校名を附するを許さず、因て同會は相談會を開きて評議したるに、頗る過激なる議論起りしも、遂に平和をとりて光鹽青年會の名を附するに至れり、其集會は八月を除き、祈禱、勸話、相談等をなし、又臨時親睦會を催すとありとぞ。

●忠愛之友倶樂部　は仙臺高等中學校內に在る基督教青年會なり、會員三十名、全校生徒の二十分の一に過ぎず、されど基督に由れるの信仰は、他日の盛大を必すべし。毎月二回の例會を開き、會員互ひに懇話すといふ。

宮城縣通信

◎廢娼請願書　宮城縣加美郡宮崎村の山田喜平治氏外數名には、今度本縣會に向て廢娼請願書を差出したり。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

皇后陛下
明宮殿下御覽濟の書

再版

(リツトル。ロード。フオントルロイ)

小公子

巖本善治妻譯

小供のよみ本

發行所

歲暮新歲の贈物

森田思軒居士の批評

余紛々たる世間の譯文に於て平生甚だ許可少なし獨り若松賤子の「小公子」に驚嘆す今「罪と罰」を得て又之を二にせむとす二書が皆な其文を俗話躰に取りしは極て智なり苟も俗話を以て文となせば其詞を採り其の方式を求むるの廣くして且つ便なる事夫厨婢の偶語も直ちに我が文の資とならざる無し若し專ら雅言を用ひば「小公子」のフォントルロイが始て老侯爵に謁する處本書の酔漢が酔言する處の如き余は恐る縱ひ賤子不知庵が如意の筆を以てするも寫して今の文の半ばにも至るを得ることは能はざるを余は是に於て益々世間の譯者の弱處が其詞に貧なるの一事に根する者多きを知る

定價金三拾八錢の所今回歲暮、新年の贈物として特別

金廿八錢(郵稅金八錢)に引下候間續々

購求被下度候

東京市麴町區下六番町六番地

女學雜誌社

女學生

第三十號 十二月廿一日發兌 一冊價四錢

社說

謹は默禮なり……天知子

時の感

歲將に暮れんとす。女流文學。明治廿五年文界

一葉女史。裏錦。日本文學史。近刊雜書。

詩歌の卷

漫筆

山里の友……秋月澄子

友松を訪ふ……(女子學院)……なぎさ

昔ばなし

詩人クーパー

榎本其角と大高源吾。

文欄

卒業に際して……(立教)……堀塲いと子

故鄕を思ふ……(共立)……無名子

學業に就ての志想……(女子學院)……後凋女史

女子の務……(梅香崎)……小久江てい子

文學の栞

評

拾遺集和歌集に付て。

女學雜誌社

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

故近藤賢三君　高橋要亮君同著

増訂三版

經濟秘法

廢物利用

上下合本

正價金三拾五錢
郵税金四錢

目次

魚類の廢物より石鹼を製する事
藻を以て紙を製する事
魚類にて紙を製する事
鯨の上肉より蠟を採る事
海草より砂糖を採製する事
牛馬豕の血液より大利を得る事
馬肉を食用にすべき事
牛の毛用ひ方種々ある事
松樹よりテレビン油を採製する事
松の木にて綿又は布を造る事
茗荷にて糸を製する新法の事
蒲草より綿を採る事
桑の皮より綿を採る事
玉蜀黍の莖より糖蜜を製する事
松葉を布團綿を製する事
甘藷は用ひ方にて大利を得べき事
石決明、タカヒ等の介殼を釦鈕となす事
澁柹を用て砂糖を製する事
石を煮て和らかにて器物を造る事
青竹を煮て白色にする事
角を煮て糊餅の如くし之を器に作る事
王蜀黍の莖をコルクに代用する事
檞實にて食物を製する事
食物を新鮮の儘にて貯へ置く事
牛肉鳥肉を柔軟に煮る事
桑の皮より紙を製する事
馬鈴薯より乾酪を製する事
廢衣より藍を製する事
古靴の利用法
馬鈴薯にて澱粉を採る事
酒糟にて醤油を造る事
柚餅子の製法
落花生の搾粕にて味噌を製する事
藤蔓にて布を製する事
獸角の細工物に著色する事
紙を以て夜具を製する事
大口魚の無臭肝油を製する事
杉の葉にて線香を製する事
眞珠を摸造する事
藁にて綿を製する事
桃榔樹より護謨を採る事
馬鈴薯よりアラビヤ護謨を製する事
甜菜を以て板材を製する發明
菓實よりアルコールを製する事
床の下の土より硝石を取る事
生骨の煮汁より膠を採る事
蛙の皮の利用する事
綿布の油汚を脱く事
衣服に汚點の附きたるを脱く事
白フランネルを洗濯する事

其他百四拾六件

發賣　東京市麹町區上六番町六番地　女學雜誌社

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

女學雜誌社出版書目錄

著者	書名	册數	正價	郵税
鈴木弘恭大人述	文法口授	全	金拾二錢	金二錢
松山高吉君著	邦文學	全	金二拾錢	無郵税
鈴木弘恭大人述	雅俗諸體 作文口授	全	金二拾五錢	金四錢
同講述	徒然草講義	一	金八錢	金二錢
同標注	參考標注 徒然草抜萃	全	金貳十錢	金四錢
同著述	參考標注 竹取物語讀本	全	金貳拾錢	金四錢
同著述	標注參考 土佐日記讀本	全	金二十錢	金四錢
同著	女學校用讀本 國文抄讀	五册	一册 金二拾二錢宛	一册 郵税金四錢宛
池袋清風大人著	淺瀨の波	二册	金三拾錢	金四錢
松田敏足君著述	明治 女小學躾草	上下	金四拾錢	金六錢
香月恕經君著	記事文範 女子文例	全	金二拾二錢	金四錢
木村熊二君著	漢文抄讀	四册	一册 金二拾四錢宛	一册 郵税金四錢宛
横山雅男君著	婚姻論	全	金十六錢	金四錢
船越鼎太郎君著	産婦小兒 攝生法	全	金十錢	金二錢
三島通良君著	母のつとめ	母の卷 子の卷	金七十錢	金六十錢
女學雜誌社編輯	兒育草	全	金二拾錢	無郵税
同編輯	女子生理	全	金二十五錢	無郵税
同編輯	子供のはなし	全	金五錢	金二錢
村木經證君述	家政要旨	全	金五錢	金二錢
藤尾鉄郎君著	家計簿記法	全	金二十錢	金四錢
透谷子著	蓬萊の冋	全	金八錢	金二錢
巖本善治君著	女學叢書 木村鐙子傳	全	金八錢	金二錢
安東松治郎君著	貧兒の教育	全	金六錢	金二錢
井上藤平君編	訓蒙絵双紙 猫と鼠	全	金五錢	金二錢
久野正香君著	看護婦美談	全	金貳拾五錢	金六錢
巖本善治君著	吾黨の女子教育	全	金拾錢	無郵税
坪谷善四郎君著	日本女禮式	全	金五十錢	金十二錢
小野鵞之助君編	かな習字帖	三册	一册 金拾錢宛	一册 郵税金二錢宛
同編	文かきふり	二册	金三十六錢	金六錢

鈴木弘恭大人講述　附錄小倉てびき

第四版 百人一首講義

本書の高評なるは人の知る所にして、懇切にして解し易く、クリスマス、年暮、新年の贈物には、和歌の手引には最とも甚だ適當なりとす。

正價金廿八錢
郵税四錢

女學雜誌大取次所

東京市本町三丁目　瑞穗屋卯三郎
同錦町二丁目　武藏屋藤藏
同尾張町二丁目　東海堂
同瀰左衛門町　嚴々堂
同表神保町　東京堂
同出雲町　警醒社
同鐵砲町　指金堂
同元富士町　盛春堂
同雉子町　團々社
福岡縣福岡　積善館支店

神奈川縣横濱市　共同新聞發賣會社
同　万字堂
京都佛光寺烏丸　東枝律書店
同新町竹屋町　便利堂
大坂本町四丁目　岡島支店
同　福音社
神戸元町四丁目　福音社
函館市　福音社
熊本縣熊本　草野門平
京都新町二條　大黑屋書店

女學雜誌市內賣捌店

麹町區上六番町　日盛堂
同三番町　梅仙舍
同　福音屋
同飯田町　三文字堂
同　洗心堂
神田區神保町　松江堂
同　青柳堂
同雉子町　大塚書籍店
牛込區神樂町　積善堂
同　正導舍
同肴町　深田彌兵衛
本郷區眞砂町　文壽堂
同　就本堂
同富士前町　解明堂
同　盛春堂
同二丁目　古河屋

下谷區東黑門町　三一堂
神田區松岡町　山口次郎
同旅籠町一丁目　槇本
同鍋町　清水嘉兵衛
日本橋區本町三丁目　庭花屋
芝區櫻田本郷町　鈴木新兵衛
同南佐久間町　栗原
同同　鈴木
赤坂區新町　赤川市兵衛
同同　飯山
京橋區尾張町　鈴々木
同出雲町　金盛堂
同　山川堂
本郷區天神町　改進堂
神田區小川町　大塚雜誌店
同錦町二丁目　眞故堂

其他書籍絵双紙店に於而賣捌く

女學雜誌第三百二十號より改正仕り同號より白赤の二種に別ちたれば五月限り帳簿上も亦改正致度候間舊號迄の**雜誌代金**至急御拂込相成度候。

爲替は **麹町郵便局** へ御振込被成下度候

女學雜誌社發送部

一雜誌及び書籍代金二十錢未滿は郵券代用不苦候、郵券は五厘切手一割增の事
一雜誌及び書籍代金通運便にて御送付の向は屆け賃とも濟にして御送付相成度候

女學雜誌代價廣告料及無料廣告

○白赤双方合せ購讀の分

十冊	前金五十八錢	府外	六拾三錢
廿六冊(半年)	同一圓四十三錢	同	一圓五十六錢
五十二冊(一年)	同二圓六十錢	同	二圓八十六錢

○白赤の內一方購讀の分

六冊	前金三十五錢	府外	三十八錢
十三冊(半年)	同七十三錢	同	七十八錢
廿六冊(一年)	同一圓三十錢	同	一圓四十三錢
一冊	金六錢	郵税金五厘	

一行(廿七字詰)	一回	前金拾錢
同	三回以上	一割引
同	六回以上	二割引

○十行以上一割引。二十行以上二割引。
○四十行同四割引。
但し不道德なる廣告は謝絕す、慈善の廣告は社議の上無代價にて引受く
○特別廣告は婦女に關する協會會合等の記錄を掲ぐるものにて一切無料とす但し紙面半頁分の廣告を載する每に右雜誌十部注文を要し以上半頁每に十部增と定む。

發行所

東京市麹町區下六番町六番地

女學雜誌社

編輯兼發行人　巖本善治
印刷人　堀口庄三

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY